

先輩のコツに学ぶ！ ～困ったときのQ & A～

Q 1 学級開きは大切と聞きましたが、どんなことをするの？

A 新年度、子どもたちは、新しい学年、学級、教師、友達に対して大きな期待をもって登校します。子どもたちが「この学級ならがんばれそうだ」という安心感をもち、「いろいろなことに挑戦して自分を伸ばしたい」という意欲がもてる出会いにしましょう。

(1) 担任の思いや願いを伝える

始業式のあと学級で



出会いの印象はその後の信頼関係に大きく影響します。笑顔ではつらつと語りかけましょう。

教師から自己紹介

始業式で姿勢よく話が聞いていたよ。
みんなに会えるのを楽しみにしていたよ。

担任の願いや思いを伝える

一人一人が主役 いじめは絶対に許さない
みんなが安心して過ごせる学級にしよう



(2) 学級開きからの一週間を大切にす

学級開きから1週間

新しいことにチャレンジしよう！という気持ちが、一番強いとき

ルールの定着

- ・ 基本的な生活習慣
あいさつ、時間を守る、話を聞く等
- ・ 朝の会や帰りの会の進め方
- ・ 当番活動の仕方 等

教師と子どもの信頼関係を築く

- ・ 子どもの動きをよく観察 (授業・休み時間等)
- ・ 子どものよさを認める

先生はいつも見てくれている



努力している姿や新しい学級のために協力しようとする姿などを承認しましょう。

Q 2 教室環境は、どのようなことに配慮したらよいの？

A 「環境が人を育てる」といわれるように、整った教室環境は子どもたちの生活の落ち着きや心の安定につながります。子どもたちが一日の大半を過ごす教室が居心地のよい場となるように、以下の点に留意して、教室環境づくりに努めましょう。

(1) 整理整頓

- ・ ごみや物が落ちていない
- ・ 掲示物が外れていない
- ・ 教室の棚や個人のロッカー等の整理整頓



「何を」「どこに」「どのように」置けばよいのか写真や文字で明確に示すことも効果的

整った教室環境で過ごすことは気持ちがいいなあ。

(2) すっきり、シンプルに

- ・ 教室前面の掲示物は必要最小限に
視覚的な刺激は集中の妨げとなる
- ・ 黒板の周りはすっきりと



(3) お互いを認め合う場に

- ・ 学級や子どもたちの成長が分かるもの
- ・ 子どもたちがアイデアを出し合う係活動
- ・ ありがとうメッセージコーナー 等



自然と会話の生まれる教室環境の工夫をしましょう。お互いが認め合える温かい雰囲気の中で、子どもたちは自信と達成感を得ることができます。

Q 3 朝の会にはどのような内容があるとよいの？

A 朝の会は、一日のスタートとなる貴重な時間です。子どもたちに一日の見通しや目標をもたせ、気持ちよく一日の生活が始められるようにしましょう。

(例)

- あいさつ …明るく、さわやかに、1日を気持ちよく始める
- 今月の歌 …みんなで元気よく歌い、学級への所属感を高める
- 健康観察 …一人一人の様子を確認しながら、しっかり名前を呼ぶ



係や委員会からの連絡 …子どもたちが主体的に活動する場を設定する

1日のめあて …子どもたちがめあてを設定し、意識しながら生活させる

先生の話 …見通しをもって行動できるよう、その日の予定を簡潔に知らせる

※朝の会がスムーズに進行できるように

1分間スピーチ



子どもの発達段階に応じては、司会が自信をもって進行できるように、進め方を用意しておくといよいでしょう。

Q 4 帰りの会ではどんなことに気をつけるとよいの？

A 帰りの会は、今日の出会いに感謝をし、明日へとつなげる大切な時間です。だらだらと叱責して長引く帰りの会をしたり、「よくなかったこと」の反省会で終わったりしないようにしたいものです。そのためにも、その日あった「よかったこと」を伝え合い、「明日も学校に来たいな」という思いがもてる時間にしましょう。

(例)

よかったこと

係りからの連絡

一日の振り返り

明日の予定

先生の話

「よかったこと」は、隣の友達やグループで伝え合ったり、順番を決めて発表したりすることもできます。また、カードに書き、掲示することもできます。教師も同様にうれしかったことや感謝したいことなど自分の気持ちを伝えましょう。

今日のMVPは〇〇さんです。音楽の時間が終わった後、最後まで残って椅子の片付けをしてくれました。



子どもたちとハイタッチをしながら一人一人に声をかけたり、じゃんけんをしてスキンシップを図ったりするなど、自分なりの工夫をして笑顔で下校できるようにしましょう。

どんなにいそがしくても「さようなら」のあいさつは、安心した雰囲気の中、笑顔で行いましょう。

Q 5 子どもの心に届くほめ方は？

A 「ほめて伸ばす」という言葉があるように、ほめることは子どものやる気を伸ばす効果的な方法です。しかし、ただやみくもにほめればよいというものでもありません。本人や周りの子どもが望ましい行動に向かうように導くことが大切です。

(1) 具体的な行動に注目する

日常生活の場面で子どもの望ましい行動は無数にあります。そうした機会を逃さず、具体的な行動に注目して伝えるようにします。行動に注目することで、子どもが人の役に立っていることに喜びを見出せるようにしたいものです。



「ごみを拾ってくれてありがとう」「手伝ってくれて助かったよ」

(2) 努力や過程に注目する

結果だけをほめていると、点数や順位だけで人を評価してしまうようになる可能性があります。

「テストで〇点取った」
「マラソン大会で〇位になった」

結果の背景にある努力や過程を伝えることで、努力することに価値を見出す子どもに育てましょう。

「授業中、しっかり聴いていたからね」
「放課後も自主的に練習していたから、やれると思っていたよ」

(3) 本気で喜ぶ

心のない言葉を子どもはすぐに見抜きます。どんなに小さなことであっても、そのわずかな成長を見逃さず、本気で喜びましょう。自分の成長を本気で喜んでくれる人に子どもは信頼を寄せます。喜ぶことは、最高のほめ言葉です。

Q 6 子どもの効果的なしかり方は？

A 子どもたちがよりよい成長をしていくうえでしかることも必要です。子どもの可能性を信じるからこそ、しかることもできるのです。ただし、子どもをしかるということは、子どもの言い分を聞かず、感情的に怒ることではありません。以下の点に留意します。

(1) しかる理由を伝える

なぜしかられているのか理解していなければ、どんなに厳しくしかっても子どもの心には届きません。それどころか、教師に対して反抗的になったり不信感をもったりすることになりかねません。



なぜしかられているのか、子どもに納得させましょう。しかる基準を示しておくことで、しかられた時の子どもの理解を得られやすくなります。学級全体には「命にかかわる行為」「いじめやいじめにつながる行為」などの行為を子どもがした時は、毅然と「いけない」としかることで指導に一貫性をもたせましょう。

(2) 人格を否定しない

「だから〇〇さんはだめなんだ」

子どもの人格を否定する言葉です。こうした人格を否定するしかり方は子どもの自己肯定感を下げ、教師への不信感を抱かせることにつながります。



子どもたちの成長を促すためにしかり、子どもたちが「自分のことを思っただけでしかってくれているのだ」と受け止められるようにしましょう。しかった後は、さりげない言葉かけをするなどのフォローも丁寧にするようにしましょう。

Q7 子どもたちが進んで当番活動をするには？

A 当番活動とは、みんなで分担して取り組む日々の活動であり、そうじ当番や給食当番、日直などがあります。これらは学級生活を円滑に営むうえでなくてはならない活動です。子どもたちが進んで当番活動に取り組むために以下の点に留意します。

(1) 役割がすぐに分かる当番表を作成する

- ・全員が交代して公平に仕事を分担
- ・誰がいつ何をすればよいのかわかりやすく明示
- ・教室の棚や個人のロッカー等の整理整頓



誰もがいろいろな仕事を経験できるようにしましょう。また、その日の自分の仕事がしっかりと自覚できるようにしましょう。

(2) やり方や手順、分担を細かく示し、丁寧に指導する

(例) そうじの仕方

- ・ぞうきんやほうきの分担はどうするのか
- ・どこからどのようにそうじするのか
- ・早く終わった人は何をすればいいのか

「やりなさい！」だけでは活動することはできません。



何をどうやってよいか理解させることで、子どもたちが当番活動を自分たちで進められるようになります。繰り返しながら習慣化を図ることで、子どもたちが友達と協力する喜び、みんなの役に立つ喜びを味わえるようにしましょう。

Q8 「個別の教育支援計画」に基づいて「個別の指導計画」を作成している子どもを引き継いだら？

A (1)～(4)の流れで各時期に準備をすすめましょう。子どもと保護者は先生の理解と支援を必要とし、頼りにしています。安心した学校生活が送れるように、今までの支援をしっかりと引き継ぎましょう。

(1) 年度当初、引き継いだ「個別の指導計画」を熟読して、次の3つを確認

- ① 診断名
- ② 障がいに伴う生活・学習の困難さ
- ③ 具体的な支援・配慮とその成果



「子どもの困難さについてしっかり理解してくださった」と保護者が、感じると、担任への信頼感につながり、協力関係が築きやすくなります。

(2) 4月から5月初めにかけて本年度の個別の指導計画の案を作成

- ・子どもの様子を観察し・実施把握
- ・年間を通した「長期目標」と「短期目標」を設定



子どもの様子をよく知っている前年度の担任に聞くのも有効です。

(3) 5月中旬に保護者と懇談を持ち、個別の指導計画案の内容を確認

- ・保護者の意見や要望を取り入れて完成させる
- ・学校で配慮すること、家庭で実施してもらうことの役割分担をしておく

← 今後の協力体制を築く

(4) 学期末の懇談で、支援について成果と課題を保護者と振り返る

- ・次の学期に向けて支援の目標や内容を見直し、個別の指導計画を修正

Q 9 担任に反抗的な子どもがいたら？

A 反抗・挑戦的な態度は「認めて欲しい」「優しく接して欲しい」という欲求の裏返しであることが多いです。表面的な態度だけで判断せず、行動の背景について情報を集めましょう。実態に応じて対応すれば、子どもの心は開いてきます。

行動の背景を探る ⇒ 背景に応じて対応

背景 主な養育者、家族構成、家での生活の様子について情報を集める
例) 乱暴な言葉や行動で育てられている場合は、学校で暴力・暴言が出やすくなる傾向にある。



対応 担任への反抗は、家庭の養育が反映されていることがよくあります。その子の養育者とは反対の対応（厳しい→優しい、冷たい→温かい）を心がけましょう。

背景 発達障がい（LDやADHDなど）の視点で情報を集める
例) 学習不振、人との関わりが苦手など特性に基づく困難がある場合、自分が大切に思えなくなり他者に対しても厳しく対応することがある。



対応 特別支援教育主任に相談し、LD等専門員など外部の専門家に助言をもらうなどして支援方法を探り、特性に応じた支援を行います。小さなことでもできたことを認め、意欲が持てるように配慮しましょう。その際「どうしてできないの」「頑張りなさい」など、本人の努力に責任を帰する声掛けは、さらに自尊感情を低くします。

Q 10 授業中に発表する子どもが少ないときは？

A 子どもが発表しやすくなるための環境整備や活動の手順を工夫しましょう。

(1) 発問の工夫をする

発問が抽象的で意図が伝わらない時には発表が少なくなります。



子どもがイメージしやすい発問をつくります。特に、身近な問題に置き換えると考えてみようという意欲がわきやすくなります。実物などの小道具も有効です。



(2) 教師が聴く雰囲気をつくる

正しい答えや模範的な意見を求めたり、発表の内容よりも声の大きさや姿勢、返事などを指摘しすぎたりすると発表しにくい雰囲気になります。



指摘は後回しにして、顔を見て、子どもの声に耳を向けます。うなずくなどリアクションは大きめにしていることを視覚的に伝えます。声が小さい時は「いい発表なのに聞こえなくて残念。大きな声で聴きたいな」など、子どもの意欲を認めた後、望ましい姿を伝えます。

(3) 個人で思考する

発問の後すぐ発表を求めると、考えがまとまりにくいので発表が出にくくなります。



一人で思考する時間をしっかり取ります。思考を言葉にするために、キーワードだけでもノートに書くと思考がとまとまりやすくなります。

(4) 発表への抵抗感を下げる

大勢の前で一人で立って発表することが恥ずかしい児童生徒への配慮が必要です。



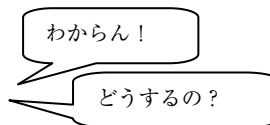
1回声に出したことは、全体の場で発表する抵抗感が少なくなります。隣同士で互いの意見を述べ合うと負担が減り話しやすくなります。

Q 1 1 授業中に私語が多く騒がしい雰囲気的时候は？

A このような雰囲気の時、指導の仕方を少し工夫すると大きく改善されることがあります。

(1) 説明・指示を明確にする

指示を修正したり追加したりすると内容が伝わりにくく、児童生徒が迷うため私語が多くなります。1つの活動が終了していないのに次の指示を出すと、私語が多くなります。



あらかじめ指示の内容をメモしておき、短く指示を出します。思いつきで指示を出すことを避けると、迷いによる私語を減らすことができます。

(2) 活動の見通しを明確に示す

児童生徒が学習や活動の見通しがもちにくいと、何をしたいかわからず、私語が多くなります。



授業の流れをパターン化したり、カードや小黒板等の視覚支援を取り入れたりすると、学習のねらいや見通しを明確にすることができます。

(3) 子どもと教師の心の距離を近づける

進度を急ぐあまり子どもを認めることが少ない、一方的な指示が多い等、子どもとの心の交流が少なくなると騒がしくなります。



子どもと一緒に笑う、子どものつぶやきに耳を傾ける等して双方向の交流を持ちましょう。心の距離が縮まると、指示が伝わりやすくなります。

Q 1 2 学校に行き渋る子どもがいたら？

A 周囲があせりすぎて子どもの自責感や恐怖心を深めないことが大切です。保護者の不安、あせりを少しでも解消し、気持ちを落ち着けて子どもに接していくようにしたいものです。子どもが決めたことを受け入れながら、寄り添っていく姿勢が子どもの生きる力につながります。



保護者との連携において配慮したいこと

- ・まず聴く
- ・保護者の立場や気持ちになる
- ・原因探しはやめる
- ・親子は別々に面接する
- ・家族・教師それぞれの役割を考える
- ・担当が抱えこまない

児童生徒に対する支援の例

- ・家庭訪問などで子どもとの関係づくりをする
- ・本人の登校についての気持ちを考える
状況を見て登校を促したり、促すのをやめたりする
- ・気持ちをゆったりとさせる
家で自由にさせる 家で親に甘えさせる
好きなことに熱中させる
- ・自分を見つめさせる
今の自分を振り返らせるとともに、これからの自分の在り方を考えさせる

初期対応例

欠席 1 日	<p>【連絡あり】</p> <p>◇欠席の理由と熱があるかどうか等、子どもの状況を把握します。</p> <p>◇次の日に安心して登校できるよう、電話等で次の日の日程や持ち物等の連絡を行います。気になる児童生徒には家庭訪問も大切です。</p> <p>◇病状を把握した上で、必要な場合は受診をすすめます。</p> <p>【連絡なし】</p> <p>◇担任外の教職員と連携し、朝のうちに連絡を取り、様子を確認します。</p>
欠席 2 日	<p>◇体調以外の原因があることも考えて、保護者から少し詳しく様子を聞きます。</p> <p>◇欠席の理由があいまいな場合や欠席理由が変化している場合は、「お見舞い」という形で家庭訪問を行います。</p>
欠席 3 日	<p>◇理由がはっきりしていても、「お見舞い」という形で家庭訪問を行い、「心配しているよ」「待っているよ」という気持ちを伝えます。</p> <p>◇欠席が続いているので、安心して学校に来ることができるように配慮します。</p>